

紹介

服部文男著『マルクス主義の形成』について

岡崎栄松

〔1〕

これから紹介しようとする服部文男教授の著作『マルクス主義の形成』（青木書店、1984年4月刊）は、教授が1957年から1983年にかけて一連の雑誌——『経済学』（東北大学経済学会研究年報）、『唯物論』（汐文社）、『現代と思想』（青木書店）、『科学と思想』（新日本出版社）、『社会科学の方法』（御茶の水書房）など——や記念論集その他に公表された21篇の論稿を統一に付して成った論文集である。それは、若干の例外を除いて、マルクスおよびエンゲルスの共著『聖家族』（1845年）にいたるまでのマルクス主義の形成期にかかわる論文によって編成されている。そして本書の成立事情については、服部教授自身、「あとがき」のなかで次のように述べておられる。

「はじめ、私は経済政策論、特に帝国主義段階における経済政策思想の研究から出発し、ヒルファーディング、カウツキー、レーニンの理論に関する論考をいくつか発表していたのであるが、1957年春から、東北大学経済学部において『社会思想史』の講義を担当することになったため、マルクス以前の諸社会思想、とりわけ空想的社会主義をはじめとして、マルクス主義の成立過程についても、ひととおりは自分自身の研究を積まなければならなくなった。本巻の諸論考の多くは、いわば私の講義案作成の準備作業、またはその副産物であった」（本書、300ページ。以下、本書からの引用はページ数のみを記す）。

このように本書は、端的にいって、東北大学経済学部における服部教授の担当科目「社会思想史」の「講義案作成の準備作業、またはその副産物」として出来上がったわけである。

ところで、一般に「紹介」という場合には、当該書物の篇別・章別にしたがって順次、内容を紹介してゆき、そのうえで、あるいはその過程でコメントを付する、といったや

り方があろうが、ここではそうした手法は採らない。むしろ私は、本書の篇・章の順序とか、それらの内容紹介とかにはとらわれずに、いきなり私流にいくつかの論点——それらにはメリットと思われる点と、問題ないし疑問だと考えられる点との双方があるが——をとりだして、それらについての私見を述べてゆきたいと思う。

* ただし、ここで本書全体の内容のアウトラインを示すために、下に「目次」をそのままの形で掲げておこう。

第1篇 マルクス主義の源泉としての空想的社会主義

第1章 空想的社会主義の評価について

第2章 サン・シモンの空想的社会主義における階級分析

補論1 マルクス主義源泉考

補論2 社会思想史のありかたをめぐって

第2篇 マルクス主義とマルクス＝エンゲルス研究

第3章 マルクス研究とマルクス主義

第4章 『マルクス＝エンゲルス全集』の現代的意義

——日本語版の完結にあたって——

第5章 フォイエルバッハかマルクスか

第6章 新『マルクス＝エンゲルス全集』とマルクス＝エンゲルス研究の新段階

第7章 マルクス＝エンゲルス研究の最近の動向と課題

第3篇 『経済学・哲学手稿』の研究

I 初期マルクスの共産主義

第8章 初期マルクスにおける共産主義思想の成立について

II 『経済学・哲学手稿』の研究

第9章 『経済学・哲学手稿』におけるいわゆるアポリアについて

第10章 『経済学・哲学手稿』の「第2手稿」および「第3手稿」をめぐって

第11章 『経済学・哲学手稿』所見

第12章 『経済学・哲学手稿』探索

第13章 『経済学・哲学手稿』研究の新段階

補論3 オイゼルマン著『マルクスの「経済学・哲学手稿」』について

補論4 マルクス抜粋ノート考

——黒滝正明氏の「所見」によせて——

III 『聖家族』論

第14章 『聖家族』の経済学的意義

——初期マルクスの経済学研究の一段階——

1 初期マルクス経済学説の形成過程と『聖家族』

2 『聖家族』における経済学的諸問題

IV 書評・展望

補論5 杉原四郎著『マルクス経済学の形成』によせて

補論6 疎外論と「市民社会論」

——望月清司著『マルクス歴史理論の研究』によせて——

補論7 マルクスの思想史的研究（学界展望）

〔2〕

はじめに、メリットとすべき所論をとりあげよう。それは、マルクスとA・ルーゲとの共編『独仏年誌』（第1・2合併号、1844年2月刊）に掲載されたマルクスの論文「ヘーゲル法哲学批判 序説」の理解にかかわるものである。服部教授は、本書第3篇第8章「初期マルクスにおける共産主義思想の成立について」の前半部分でマルクス『経済学＝哲学手稿』（1844年4月～8月執筆）の理論内容を簡潔に紹介されたのち、問題を次のように提出される。すなわち、「『ヘーゲル法哲学批判 序説』において終局的に完了したといわれているマルクスの共産主義への移行と、『経済学＝哲学手稿』において経済学的分析とむすびつけられるにいたった共産主義とは、いかなる点において異なっているのか」（147ページ）と。そして教授は、この問題を明らかにするために、さかのぼって「ヘーゲル法哲学批判 序説」の内容を立ち入って検討され、その結果として次のような結論に到達される。「……『ヘーゲル法哲学批判 序説』においては、ヘーゲル法＝国家哲学の批判を通じて、そのオリジナルたる近代市民社会の批判に達しえたにとどまり、その反面、ドイツの現実のいわゆる二重性^{*}が、行論の前提となっていた。これに対して、『経済学＝哲学手稿』においては、いわば『素材』そのものの批判に重点が移行し、イギリス、フランスにおける近代市民社会の解剖学＝経済学の批判にもとづいて、ヘーゲル哲学もまたこれら国民経済学と同一の見地に立つものであることが、確認されているのである」（156ページ）。

* ここにいう「二重性」の意味内容を示すために、「ヘーゲル法哲学批判 序説」から次の一文を引用しておこう。——「政治的現在の欠陥を一個独特の世界にまで組み立てたものとしてのドイツは、政治的現在の普遍的な柵をうちたおさないでは特殊ドイツ的な柵をうちたおすことはできないであろう」（Marx/Engels Werke (=MEW), Bd. 1, Dietz Verlag, Berlin, 1972, SS. 387-388. 『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻、大月書店、424ページ。力点——マルクス）。

服部教授の上掲の結論は、けだし、当を得たものということができようが、さきに私

がメリットとすべき所論といったのはこの結論そのものではない。それはむしろ、この結論を導きだすプロセスで教授が力説された次の論点にかんしてである。すなわち教授は、そのプロセスで「ヘーゲル法哲学批判 序説」から一連の文章を引用されるのだが、ここでは、なにかんづく次の二つの文章が重要である。

〔引用1〕——「哲学がプロレタリアートのうちにその物質的武器を見いだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神的武器を見いだす」(ebenda, S.391. 前掲訳書, 428ページ。力点——マルクス)

〔引用2〕——「ドイツでは、あらゆる種類の隷属をうちやぶることなしにはどんな種類の隷属をもうちやぶることができない。根本的なドイツは、根本から革命しないでは革命することができない。ドイツ人の解放は人間の解放である。この解放の頭脳は哲学であり、その心臓はプロレタリアートである。哲学はプロレタリアートを揚棄することなしには実現されえず、プロレタリアートは哲学を実現することなしには揚棄されえない」(ebenda, S.391. 前掲訳書, 428ページ。力点——マルクス)。

さて、上掲〔引用1〕について服部教授は次のように強調される。「……このことは、たんなる一般的表現ではなくて、まさにドイツの解放の問題にかかわるものである。ここにいう『哲学』も、さきにマルクスじしんによって、『実現せずしては揚棄しえず、また揚棄せずしては実現されない』とされたドイツ哲学にほかならない。もとより、すでに述べたように、この哲学についてのマルクスじしんの立場は、ワイトリング流の職人的＝プロレタリアの『粗野な共産主義』とも、またヘーゲル左派の哲学の必然的帰結たる『哲学的共産主義』とも異なっている。すなわち、抽象的なプロレタリア革命論とも、単なるブルジョア民主主義革命論とも異なっている。それは、近代的法＝国家（市民社会）のドイツの形態にたいする明確な認識の上に、いわゆる二重の課題相互の緊密なむすびつき〔後進国ドイツでは根本的の革命、普遍人間的な解放が部分的・政治的な革命の必須条件をなすという点——引用者〕を解明しようとするものであった。したがって、あまりにもよく知られた次の文章〔上掲引用2〕も、たんなる一般的命題のレトリカルな表現とみることは、おそらくマルクスの真意から遠ざかることになるろう」(153—154ページ。力点——服部教授)。

このように著者は、〔引用1〕および〔引用2〕におけるマルクスの命題を「たんなる一般的表現」あるいは「たんなる一般的命題のレトリカルな表現」と解することは「おそらくマルクスの真意から遠ざかることになるろう」とされて、それらの命題はどこ

までも「ドイツの解放の問題にかかわるもの」と解すべきだと力説されるのであるが、著者のこうした所論は、「ヘーゲル法哲学批判 序説」の理論内容についての注意深い検討に裏打ちされた卓見だというべきであろう。

- * このような見地に立つものの例として、著者は、ソ連邦の科学アカデミー哲学研究所刊行の『世界哲学史』や『哲学教程』を挙げておられる(155ページ)。

ところで服部教授は、本書第3篇、Ⅱ、第11章「『経済学・哲学手稿』所見」の冒頭で次のように書いておられる。

「1844年にマルクスの作成した草稿が、『経済学・哲学手稿』という名称を与えられて1932年に公刊されてから、すでに46年にもなる[この「所見」が最初に発表されたのは1978年、東北大学経済学会研究年報『経済学』においてであった。——引用者]。しかし、この著作ほど、論ぜられることはなほだ多いにもかかわらず、その手稿の状態についての基本的な知識すらわれわれに与えられていなかったものもめずらしい。ようやく10年前に、手稿のフォトコピーにもとづいて、ニコライ・イ・ラーピンが手稿の執筆順序にかんする研究を発表して以来、手稿の状態にたいする関心がにわかに強まった。わが国では『ラーピン論文からも刺激を受けて』、この手稿およびその準備作業としての抜粋ノートについて、アムステルダムの『社会史国際研究所』所蔵の『オリジナルをフォトコピーを通して』調査研究した山中隆次氏が、『ラーピンの「文献考証的な分析」を追試するとともに、それを補完する必要のある二、三の成果を得て』、貴重な報告を行なっている(189ページ)。

ここで『経済学＝哲学手稿』が1932年に公刊されたとあるのは、いわゆる旧メガ、すなわち同年にモスクワのマルクス＝エンゲルス研究所からアドラツキー編集のもとに出版された『マルクス＝エンゲルス全集』の第1部第3巻においてである。また、「ラーピン論文」というのは、N. I. Lapin, Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den „Ökonomisch-philosophischen Manuskripten“ von Marx. *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 1969, Heft 2. (細見英訳「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」, 雑誌『思想』岩波書店, 1971年3月号所収)のことである。さらにまた、山中隆次氏による「貴重な報告」とは、同氏の「『経済学・哲学草稿』と『抜粋ノート』の関係——ラーピン論文によせて——」(『思想』1971年11月号所収)を指す。そして服部教授の考えでは、ラーピン論文は『手稿』研究に新たな刺激を与えたものとして、また山中論文はラーピンの文献考証を一段と補強したものとして、ともに高く評価され

るべき力作である。

だから教授は別の諸章、つまり第10章と第12章で次のように述べておられる。すなわち、まず第10章（この章の内容をなす論文は1977年執筆）では——「いわゆる『経済学・哲学手稿』を構成する三つの手稿のうち、『第1手稿』については、最近10年ほどのあいだに飛躍的な研究の進展が見られ、特にエヌ・イ・ラーピンによって提示された見解は、個々の点ではなお問題を残すとはいえ、大筋においては、ほぼ大方の承認をえたかに思われる」（168ページ）と。つぎに第12章では——「1968年にソ連の研究者ラーピンがフォトコピーの綿密な検討にもとづいて、三欄『手稿』の「第1手稿」ではマルクスは、用紙を横長にして各ページをあらかじめ三欄（一部は二欄）に区分し、それぞれの欄の頭部に左から「労賃」・「資本利潤」・「地代」という見出しをつけていた——引用者]の平行的記述のうち中央の『資本』欄から執筆が始められたとする説を発表した前後から、わが国でも『第1手稿』の執筆順序ないし執筆諸段階が問題とされるようになった。さらに、山中隆次氏がアムステルダムの『社会史国際研究所』でのフォトコピーの調査（「第2手稿」および「抜粋ノート」についてはオリジナルによる調査）にもとづいて、ラーピンの分析の追試と補完を行なったことによって、われわれの手にした情報は、格段に正確かつ豊富になった」（201—202ページ）と。

このように服部教授は、ラーピン論文と山中論文とをともに高く評価しながら、これらの論文によって『経済学＝哲学手稿』にかんする「情報」が「格段に正確かつ豊富になった」とされるのだが、しかし教授にとっては、「これらの内外の研究にもかかわらず、なお不明の点が残っていたし、さらに新たな疑問も生じてきた」（189ページ）のであった。そこで教授は、上記二論文をはじめとする内外のおびただしい文献を渉猟しつつ、『手稿』について「書誌学的考察」をくわえられ、その成果を第10章『『経済学・哲学手稿』の『第2手稿』および『第3手稿』をめぐって』のなかで整理・集約された。教授自身、この点を同章（前記のように、この章は1977年執筆）末尾の〔追記〕において次のように書いておられる。「本稿〔つまり本書第10章〕は、昭和52（1977）年度の文部省在外研究員としてドイツ民主共和国を訪れる可能性が大となった段階で、短期（2カ月）の在外研究を有効に活用するために、主要な研究・調査の対象である『経済学・哲学手稿』について、国内外の従来の諸研究のこれまでの到達点と、なお不明確である点とを、巨細の別なく検討したものである」（188ページ）。

ただ、ここで指摘しておかねばならない点がある。それは、著者が『経済学＝哲学手

稿」にかんして「書誌学的考察」を重視される理由である。著者はこう述べておられる。「いうまでもなく、書誌学的考察は内容の理論的分析にとってかわることはできないが、逆にきわめて不十分なし不正確な書誌学的知見にもとづく理論的考察は、空虚な思弁にみちびくおそれなしとしない。特に『経済学・哲学手稿』のように、1932年の公刊以来、その思想史的重要性の前に書誌学的調査研究という基礎的作業がほとんどまったく無視されてきた文献のばあいには、理論的研究の進展にともなって、つねにその資料的根拠を問い直す必要があるように思われる」(208ページ)。

つまり、著者にとっては、「書誌学的考察」はそれ自体が目的ではなく、どこまでも「内容の理論的分析」ないし「理論的研究」のための「基礎的作業」なのである。いいかえれば、著者にとっては「なよりも手稿の内容の理論的把握が重要であることはいうまでもない」(195ページ)のであり、こうした「理論的把握」の深化の前提となるのが「書誌学的考察」だというわけである。もし、このような点が十分自覚的に意識されていなかったとすれば、著者による詳細かつ精密な「書誌学的考察」も、不毛な、たんなるトリビアリズムに陥っていたであろう。

それはともかく、「昭和52(1977)年度の文部省在外研究員としてドイツ民主共和国を訪れる」という服部教授の前記の希望は、翌1978年になってようやく実現の運びとなった。教授は当時のことを回想して大略、次のように記しておられる(189—190ページ、参照)。——自分は、1978年3月末から同年5月末にかけての2カ月間、主としてドイツ民主共和国の首都ベルリンにおいて、新MEGA編集作業の視察をかねて『資本論』成立過程の研究をおこなう機会が与えられたので、『経済学—哲学手稿』についても、まずアムステルダムの「社会史国際研究所」でフォトコピーによる調査を終えたのち、東ドイツの「マルクス—レーニン主義研究所」においてこの『手稿』の研究者たちと意見交換をすることができた。「とりわけ望外の幸運ともいふべきこと」は、同年4月27日に東ドイツの上記「研究所」で開催されたマルクス—エンゲルス部第1セクターの報告討論会(コロキウム)において、同セクター長のインゲ・タウベルト女史による報告草稿『『マルクス—エンゲルス全集』第2版第I部第2巻における『経済学・哲学手稿』のテキスト整序』を閲読しえたこと、さらになお、モスクワの「マルクス—レーニン主義研究所」から参加していたアレクサンドル・イ・マールィンおよびゲオルギー・ア・バガトウーリヤ両氏と東独「研究所」側との、この報告にかんする討論をも傍聴できたことであった。

服部教授の東独「研究所」を中心とした調査研究は、2カ月間という短い期間ではあったが、しかし、それは非常に充実した貴重なものであった。教授自身、本書の「あとがき」のなかで次のように書いておられる。「たまたま、1978年、短期間ながら文部省在外研究員の選に入った私は、アムステルダムの『社会史国際研究所』およびベルリンの上記『マルクス＝レーニン主義研究所』において、マルクスの草稿に接する機会を与えられ、またこれをめぐるコロキウムに参加することを許された。すでに50歳台の半ばに達していた私にとって、これら両研究所での調査と研究は、この上なく貴重な、かつ実り多いものであった」（300ページ）。

このように、アムステルダムの「社会史国際研究所」とベルリンの「マルクス＝レーニン主義研究所」での服部教授の「調査と研究」は、教授自身が自負しておられるとおり、「この上なく貴重な、かつ実り多いもの」だったのだが、こうした点は、第3篇『『経済学・哲学手稿』の研究』Ⅱ、第11章以下の諸章、わけでも第11章から第13章までの、いわば『手稿』にかんする「調査研究報告」の部分を読めば十分に首肯しうるところであろう。そして、服部教授がこういう大きな成果をあげたのは、すでに見たように、教授が出発に先だって、「短期(2カ月)の在外研究を有効に活用するために、『経済学＝哲学手稿』にかんする「国内外の従来諸研究のこれまでの到達点と、なお不明確である点」と、さらに「新たな疑問」(188—189ページ、参照)などを、あらかじめ入念に整理・集約しておられた（とくに第10章所収の論稿『『経済学・哲学手稿』の『第2手稿』および『第3手稿』をめぐって』のなかで）ことによるものであろう。この意味において、教授の「在外研究」は文字どおり模範的なものであったといつてよく、その「貴重な」成果が本書を、とりわけ『手稿』の「書誌学的考察」の点で綿密かつ内容豊かなものに行っているのである。そして、こうしたところに本書の大きな——というよりも主要な——メリットがある、といつてよからう。

なお、上記のことと関連して、本書第12章では、教授がアムステルダムの「研究所」を訪れて『経済学＝哲学手稿』の「コピーの束」を手にしたときの度重なる「おどろき」が生き生きと描かれており、さらに第13章では、ベルリンの「研究所」会議室におけるコロキウム(1978年4月27日)の様子が、これまた生き生きと再現されていて興味深い。

さて、本書の著者・服部教授は、『手稿』のいわゆるアポリアについて次のように述べておられる。

「かなり多くの人びとによって、マルクスは『経済学・哲学手稿』のなかで解決する

このできないアポリアに逢着した、とされている。すなわち、マルクスは、私的所有が疎外された労働の所産であり、帰結であることを明らかにしえたものの、疎外された労働そのものが何によって生みだされたかについては、明確に答えることができなかった、というのである。では、マルクスはこの問題について、いつ、どこで、解決をあたえたとされるのであろうか。これについては、マルクスとエンゲルスとの共同著作『ドイツ・イデオロギー』のなかの分業論が解決をあたえている、とする見解が有力であるように思われる。……問題は、マルクスが『経済学・哲学手稿』のなかで、はたして論者の指摘するようなアポリアにおちいったのであろうか、という点にある。私は、この種の見解について、大きな疑問をもっている」（160ページ）。

見られるとおり、服部教授は、『手稿』においてマルクスは「疎外された労働そのものが何によって生みだされたか」にかんして「解決することのできないアポリア」に陥ったとして、このアポリアの解決は『ドイツ・イデオロギー』の分業論によってはじめて与えられた、とする「有力」な見解にたいして「大きな疑問」を表明されるわけである。そして教授自身は、『手稿』中の一文を引用しながら、次のように力説される。

「……注意すべき点は、マルクスが資本主義的私的所有の本質を解明するにあたって、ブルジョア経済学にみられるように、たんに過去の歴史的事実にさかのぼるという方法をとるのではなくて、まだ不明確な点を残しながらも、資本主義的生産関係そのものが再生産される過程をとらえようとしていたということである。このことは、『労働はただ諸商品を生産するばかりではない、それは労働自身と労働者とを商品として生産する、しかもそれが一般に諸商品を生産するのに比例して』とのべられていることに示されており、また『疎外された労働』の四つの規定の展開のうちにも看取されうるところである」（162ページ）。

ここで、「ブルジョア経済学にみられる」「たんに過去の歴史的事実にさかのぼるという方法」とは、たとえばアダム・スミスのように、「資本の蓄積と土地の私有に先だつ初期未開の社会状態」(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, ed. by Edwin Cannan, 6th edn., London, 1950, vol. I, p. 49. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』I, 岩波書店, 131ページ)を想定するといったやり方のことである。また、『疎外された労働』の四つの規定」というのは、よく知られているように、①労働生産物からの労働者の疎外、②労働＝生産活動そのものにおける疎外、③「類的存在」からの労働者の疎外、および④「人間からの人間の疎外」のことである。こうしたことはともかく

として、著者によれば、『手稿』ではマルクスは「疎外された労働そのものが何によって生みだされたか」を不十分なながらも明らかにしているのであって、もともと『手稿』にはアポリアなるものは存在しないわけである。この点について著者は、『手稿』から他の一連の文章を援用しながら、十分説得的に論証しておられるが、これは蓄積論重視の見地に立つ著者の強みだといえることができる。また、ここに本書のもう一つのメリットがあるといってもよからう。

* この問題の完全な解決が与えられるのは、1850年代以降のことであって、そのことにかんして著者は、たとえば次のように説いておられる。「もちろん、『手稿』の段階のマルクスによつては、資本主義社会における『労働の疎外』を生ぜしめ、したがって資本主義的所有を成立せしめた歴史的條件、すなわちブルジョア経済学のいわゆる『本源的蓄積』の現実的内容をなす『本源的収奪』の過程は、まだ解明されていなかった。したがって『手稿』でマルクスが提起した問題〔人間はいかにして彼の労働を疎外するにいたるかという問題——引用者〕の完全な解決は、1840年代のマルクスの理論水準によっては不可能であり、1850年代以降のブルジョア経済学批判のいっそうの進展をまたなければならなかったのである」（232ページ）。

なお、『手稿』のいわゆるアポリアについては、拙稿「初期マルクスの経済理論について——『経済学＝哲学手稿』を中心として——」、『立命館経済学』第16巻、第3・4合併号、114—115ページを参照されたい。

** たとえば、著者は資本蓄積論を格別に重視しつつ、「私見によれば、『経済学・哲学手稿』において最も注目しなければならないのは、マルクスによってスマイス蓄積論の根本的批判が行なわれている点であるが、かかる『経済学批判』の基軸こそが『疎外された労働』なる概念にほかならず」（268ページ）云々と強調しておられる。

また、同じ蓄積論重視の見地から著者は、たんに『手稿』についてだけでなく、総じて「1840年代の〔マルクスの〕諸労作」について次のように強調しておられる。「マルクスが『経済学・哲学手稿』以降、1840年代の諸労作を通じて、特に主眼としたところは、資本主義的蓄積の敵対的な性格の解明であり、また資本関係そのものの再生産を必然的なものたらしめるしくみの究明であった。このことは、ブルジョア経済学による『私的所有』のあやまった把握、すなわち、自己労働にもとづく所有に眼をうばわれ、資本主義的『私的所有』の起源を『虚構の原始状態』にもとめる見解にたいする批判にむすびついている。従来の諸見解は、1840年代のマルクスの経済学研究のこのような特徴を十分に認識しているとはいえないように思われる」（165—166ページ。力点——引用者）。

[3]

ところで著者は、本書第8章「初期マルクスにおける共産主義思想の成立について」

のなかで、次のように主張しておられる。——「もとより、『手稿』にはじまるマルクスの国民経済学批判は、1840年代を通じて、なお未完成の点を残していることは否定できない。一言でいえば、それは、なお資本蓄積論の観点のみからする国民経済学批判のころみであったと評しうるであろう。そこには、基本的にいって、その基底となるべき価値論＝商品把握はまだ確立していない。50年代以降の経済学研究と一線が画されるゆえんである」（156ページ。力点——服部教授，ゴシック——引用者）。

このように著者は、1840年代のマルクスの「国民経済学」批判が「なお未完成の点を残していること」を指摘されるのであるが、そのさい著者は、マルクス『賃労働と資本』（1849年公表）1891年版へのエンゲルスの「序説」における次の叙述、すなわち「40年代には、マルクスはまだ彼の経済学批判を完成していなかった。これは50年代の末によりやく達成されたのである」（MEW, Bd. 6, S. 593. 『全集』第6巻, 578ページ）という叙述を念頭に浮べておられる。事実、著者はエンゲルスのこの文章を上掲主張のすぐあとに引用・注記しておられる（158ページ，参照）。

それはともかく、『手稿』にはじまるマルクスの「国民経済学」批判が「1840年代を通じて」なお「未完成」であったことは、著者やエンゲルスの指摘するとおりでであろう。また、当時のマルクスにとって「資本蓄積論の観点」が「国民経済学批判のころみ」にさいして重要な視角をなしていたことも、たしかであろう。

- * この点については、周知のようにマルクス自身、『経済学批判』（1859年）への「序言」のなかで、こう書いている。「……よりやく1850年になってロンドンで私はふたたび経済学研究にとりかかることができた。大英博物館に積み上げられている経済学の歴史にかんする膨大な資料、ブルジョア社会の観察にたいしてロンドンがあたえている好都合な位置、最後に、カリフォルニアおよびオーストラリアの金の発見とともにブルジョア社会がはよりこむように見えた新たな発展段階、これらのことが、まったく初めからやりなおして、新しい材料を批判的に研究しつくそうと私に決意させた」（MEW, Bd. 13, SS. 10-11. 『全集』第13巻, 8ページ。力点——引用者）

しかし、服部教授の上掲主張については次の二つの点が問題になると思われる。(1)『手稿』にはじまるマルクスの「国民経済学批判のころみ」は、「1840年代を通じて」「資本蓄積論の観点のみからする」ものであったと評しうるであろうか？ (2)なるほど1840年代には、古典学派の水準を超えるマルクス独自の「価値論＝商品把握」はまだ確立されていなかったにしても、たとえば『哲学の貧困』（1847年7月刊）でのマルクスは、リカード価値論＝労働価値説を積極的に評価しながら、すでに彼自身、労働価値説の

見地に到達していたのではないだろうか？

まず(1)の点についていえば、1840年代のマルクスの経済学研究は、服部教授の主張されるように「資本蓄積論の観点のみ」からおこなわれたわけではあるまい。いま、ここでわれわれは、マルクスの経済学研究は、エンゲルスとの共著『ドイツ・イデオロギー』（1845—46年執筆）で荒けずりの形においてではあれ唯物史観の基本構想が樹立されて以降は、それを「みちびきの糸」としておこなわれたこと、こうして『哲学の貧困』では、のちに『資本論』全3巻をつらぬく基本視角の一つとなったところの、特殊歴史的な形態規定の観点、すなわちブルジョア社会のすべてのカテゴリーを一定の歴史的に規定された生産関係の表現としてとらえる観点がすでにうちたてられていたことに、とくに注意しなければならない。ここでは、この点を示すために、とりあえず『哲学の貧困』から次の一文を引用しておこう。少し長いが重要な文章なので、あえて掲げておくことにする。

「社会的諸関係は生産諸力に密接に結びついている。新たな生産諸力を獲得することによって、人間は彼らの生産様式を変える。そしてまた生産様式を、彼らの生活の資を獲得する仕方を、変えることによって、彼らは彼らのあらゆる社会的関係を変える。手回し挽臼は諸君に、封建領主を支配者とする社会を与え、蒸気挽臼は諸君に、産業資本家を支配者とする社会を与えるであろう。/だが、彼らの物質的生产力に照応して社会的諸関係を確立するその同じ人間が、彼らの社会的諸関係に照応して諸原理・諸観念・諸カテゴリーをもまた生みだすのである。/それゆえ、これらの観念、これらのカテゴリーは、それらの表示する諸関係と同様に、永久的なものではない。それらは、歴史的な、一時期だけの経過的な産物である」(MEW, Bd. 4, S.130.『全集』第4巻, 133—134ページ。力点——マルクス)。

この文章からも察せられるように、1847年当時のマルクスは、『ドイツ・イデオロギー』で樹立された唯物史観の基本構想を「みちびきの糸」としながら、資本主義の生産様式を、ある時点で発生し、発展し、やがて他の時点で消滅する過渡的・経過的なものと解していたのであり、こうして彼は、ブルジョア社会のあらゆる範疇を一定の歴史的に規定された生産関係の表現としてとらえる立場を確立しえたのであった。そして『哲学の貧困』でのマルクスは、「国民経済学」批判にとって決定的に重要なこの立場にすでに到達していたからこそ、同じ書物の他の個所で、たとえば「国民経済学者」リカードウの地代論を次のように批判することもできたのである。——「リカードウは、ブルジョ

アの生産をば、地代を決定するうえで必要なものとして前提しておきながら、しかもなお、それ〔地代概念〕をあらゆる時代、あらゆる国々の土地所有に適用する。これは、ブルジョア的生産の諸関係を永久的な諸カテゴリーとして表現するすべての経済学者の常套手段である」(ebenda, S. 170. 前掲訳書, 178ページ)。

こうしてわれわれは、あらゆる経済学的範疇を一定の歴史的に規定された生産関係の表現としてとらえる観点、つまり特殊歴史的な形態規定の立場が、すでに『哲学の貧困』において確立されており、それが当時のマルクスの経済学研究にとって本質的に重要な観点の一つをなしていたことを知るのである^{*}。そしてそのかぎりでは、服部教授のように、『手稿』にはじまるマルクスの「国民経済学批判のころみ」は「1840年代を通じて」「資本蓄積論の観点のみからする」ものであったと評するのは、私には一面的にすぎると思われるのだが、どうであろうか？ 端的に言って、この場合には、教授は蓄積論重視の立場から、勢いあまって蓄積論偏重の立場に陥っておられるのではあるまいか？

* この点については拙稿「マルクス経済学の基本的性格」、島恭彦・宇高基輔・大橋隆憲・宇佐美誠次郎編『新マルクス経済学講座』第1巻、有斐閣、9—11ページを参照のこと。

なお、特殊歴史的な形態規定の立場が1840年代のマルクスの経済学研究にとって重要な一視角をなしていた、というこの点を示すいま一つの例として、『賃労働と資本』から次の所論を引用しておこう。「資本もまた一つの社会的生産関係である。それは一つのブルジョア的生産関係であり、ブルジョア社会の一生産関係である。資本を構成する生活資料、労働用具、原料、それらは、一定の社会的条件のもとで、特定の社会的関係のなかで生産され、蓄積されたものではないだろうか？ それらは、一定の社会的条件のもとで、特定の社会的関係のなかで、新しい生産に使用されるのではないだろうか？ そして、ほかならぬこの特定の社会的性格こそ、新しい生産に役だつ生産物を資本にするのではないだろうか？」(MEW, Bd. 6, S. 408. 『全集』第6巻, 403—404ページ。力点——マルクス)。

つぎに(2)の点、すなわち、古典学派の水準を超えるマルクス独自の「価値論—商品把握」が確立されるのは、服部教授のいわれるとおり1850年代以降のことであるにしても、たとえば1847年刊の『哲学の貧困』ではマルクスは、リカードウの投下労働説あるいは労働価値説に積極的の評価を与えつつ、彼自身、すでに労働価値説の見地に達していたのではないか、という点。この点については、やや詳しく私見を述べることにしよう。

まず最初に、『哲学の貧困』においてはマルクスはすでに労働価値説に立脚しているという点を示すものとして、同書から次の二つの文章を引用しておこう。

「物の効用がひとたび認められれば、労働は価値の源泉である。労働の尺度たるものは時間である。諸物の相対的価値は、それらの生産物を生産するのに費やされなければ

ならなかった労働時間によって、決定される。価格は、一つの生産物の相対的価値の貨幣的表現である」（MEW, Bd. 4, S. 77. 『全集』第4巻, 73ページ）。「だれでも知っているように、供給と需要が均衡を保っている場合には、任意の一生産物の相対的価値は、その生産物のなかに固定されている労働の分量によって正確に決定される」（ebenda, S. 90. 前掲訳書, 88ページ）。

これらの文章においてマルクスが、まだ主として「相対的価値」というリカードウ的表現を用いながらも、事実上、商品の価値の大きさをその生産に要する労働時間によって、または、そのなかに「固定され」投下されている労働の分量によって規定していること、こうして『哲学の貧困』では彼がすでに投下労働説＝労働価値説に立脚していることは、明らかなところであろう。のみならず、彼は同書の他の個所では、リカードウ

による価値規定とを単純に同一視してはならないとして、スミス(およびブルードン)の支配労働説、すなわち商品の「価値」(実はたんなる交換価値)をその商品が支配し購買しう

よる規定とは、まさに抽象、実在しないものにすぎない」(ebenda, S. 506. 前掲訳書, 550ページ)として、リカードウ投下労働説にたいして否定的な態度をとっていた。そして「大綱」でのエンゲルスは、「価値が生産費と競争との相互作用によって決定されるということはまったく正しいことであって、私有財産の基本法則である」(ebenda, S. 508. 前掲訳書, 552ページ。力点——エンゲルス)と述べ、さらに、「真実価値と交換価値との相違」を強調しながら、「ある物の価値は、商業のさいそのかわりに与えられるいわゆる等価物とはちがっている……、すなわちこの等価物は等価物ではない」(ebenda, S. 508. 前掲訳書, 552ページ。力点——引用者)と主張する。だが、エンゲルスがこのように主張する場合には、彼は、「真実価値」＝賃金、「生産費」＝賃金＋利潤＋地代というふうに表示しつつ、資本主義社会では商品の「交換価値」あるいは「価格」は「真実価値」(＝賃金)よりも——利潤および地代の分だけ——高くなる、と考えていたのである。つまり、この場合には、彼は事実上、賃金、利潤および地代をもって交換価値ないし価格の構成者だとするスミス構成価値説の立場に立っていたわけである。

* この間の事情については、詳しくは拙稿「初期エンゲルスの価値論および分配論について」、岡崎栄松・大島雄一編『資本論の研究』日本評論社、22—31ページを参照されたい。

初期エンゲルスのこうした見解は、『経済学—哲学手稿』とその準備ノートを執筆していた若きマルクスにたいして強い影響を及ぼしたのであって、たとえば「エンゲルスにかんするノート」には、「真実価値と交換価値との相違は、商業において与えられる等価物がけって等価物ではないということに基づく。価格は生産費と競争との関係である」(Marx/Engels Gesamtausgabe <=MEGA>, IV. Abt., Bd. 2, Dietz Verlag, Berlin, 1981, S. 485. 杉原四郎・重田晃一訳『マルクス・経済学ノート』未来社, 29ページ。力点——マルクス)と書き記されている。また、そのころのマルクスは、「リカードウにかんするノート」のなかでは次のように論じている。「リカードウは、資本もまた労働なのだから、労働が諸価格の全額を包括するという次第を展開している。セーは、……リカードウは無償で提供されたのではない資本と土地にたいする利潤を忘れたと述べている。ブルードンがこの点から次のように結論しているのは正当である。すなわち、私有財産が存在する場合、貨物はそれがあたいるよりも多くの費用がかかる。まさに財産私有者にたいするこの貢物だけ高くかかる、と」(ebenda, S. 395. 前掲訳書, 47—48ページ。力点——マルクス, ゴシック——引用者)。

見られるように、『手稿』やその準備ノートを執筆していたころのマルクスは、「大

綱』におけるエンゲルスの所説に強い影響をうけて、資本主義社会では投下労働説は妥当せず、そこでは商品の価格は——「財産私有者にたいするこの貢物」つまり利潤および地代の分だけ——価値よりも高くなると考えていたのであり、こうしてマルクスもまた、そのころはスミス構成価値説の立場に立っていたのであった。

しかし、ここでわれわれは、「大綱」でのエンゲルスと『手稿』執筆当時のマルクスとでは、リカードウにたいする評価の点で一定の微妙な相違があったことに注意すべきである。すなわち、リカードウは、その主著『経済学および課税の原理』において、たとえば次のようにいう。——「20,000ポンドの資本をもち、その利潤が年額2,000ポンドである一個人にとっては、彼の資本が100人を雇用しようと、あるいは1,000人を雇用しようと、また生産された商品が10,000ポンドで売れようと、あるいは20,000ポンドで売れようと、すべての場合に、彼の利潤が2,000ポンド以下に減少しさえしなければ、それはまったくどうでもよい事柄であろう。一国の真の利害もまた、これと同様ではなからうか？ その真の純所得、すなわちその地代および利潤が同一であるかぎり、その国の住民が1,000万人であろうと、あるいは1,200万人であろうと、それは大したことはない」(On the Principles of Political Economy and Taxation. The Works and Correspondence of David Ricardo, ed. by Piero Sraffa with the collaboration of M.H. Dobb, Cambridge University Press, vol.1, 1953, p.348. 堀経夫訳『経済学および課税の原理』、『デイヴィッド・リカード全集』第1巻、雄松堂書店、399ページ)。

このようにリカードウは、「純所得」という概念に利潤+地代を含意させようとして、「一国の真の利害」として問題なのはこの「純所得」だけだと言明したのであるが、「純人間的・一般的な基礎から出発する見地」(MEW, Bd. 1, S.502.『全集』第1巻、545ページ。力点——引用者)に立つ若きエンゲルスは、こうした露骨なブルジョアの主張を平然とおこなうリカードウに強く反撥して、「時代が前進するたびに、経済学を時勢に遅れないようにしようとして、必然的に詭弁がますますはなはだしくなる。だから、たとえばリカードウはアダム・スミスよりも罪が重く」(ebenda, S. 501. 前掲訳書、545ページ)云々と批難したのであった。

しかしマルクスは、たとえば「リカードウにかんするノート」のなかで、「国民経済学が総収入、すなわち生産と消費の分量(過剰を度外視する)したがって生活自体のあらゆる意義を否定することによって、その抽象化は汚辱の極に達した」(MEGA, IV. Abt., Bd.2, S.421. 杉原・重田訳『マルクス・経済学ノート』59ページ。力点——マルクス)と批判し

ながらも、他方では、「国民経済学的な観点に立てばリカードウの命題は正当であり筋がとおっている」(ebenda, S. 421. 前掲訳書, 60ページ)として、さらに次のように注記する。「リカードウの命題, すなわち一国民の純所得は資本家の利潤と地主の地代以外のなものでもないという命題は正しい意味をもっている。それは労働者とはなんの関係もない。そして国民経済学が労働者に関係するのは、労働者がこれらの私的利益を生み出す機械であるかぎりにおいてのみである」(ebenda, SS. 421-422. 前掲訳書, 60-61ページ)と。またマルクスは、リカードウの国民所得論に反対するJ・B・セーヤシスモンディにたいして「彼ら〔セーヤシスモンディ〕はただ国民経済学的な真理の皮肉な表現とたたかっているだけだ」(ebenda, S. 421. 前掲訳書, 60ページ。力点——マルクス)と述べて、むしろリカードウを擁護したのである。

こうしてマルクスは、はやくも『手稿』(「第2手稿」)のなかで、とりわけリカードウを念頭に置きながら、「さいきんのイギリス国民経済学の巨大な首尾一貫した進歩は、それが——労働を国民経済学の唯一の原理に高めつつ——同時に労賃と資本利子との反比例関係をまったく明瞭に解明し、資本家は原則として労賃の引き下げによってのみ逆に利得しうることを解明した点にあった」(MEGA, I. Abt., Bd. 2, Dietz Verlag, Berlin, 1982, S. 377. 三浦和男『経済学=哲学手稿』青木書店, 144ページ。力点——マルクス)と評価したのであった。

なるほど、『手稿』執筆当時のマルクスは、リカードウをこのように積極的に評価したとはいえ、それは、「疎外された労働」論の見地からであって、まだ彼がリカードウ価値論=労働価値説を容認したことを意味していたわけではない。しかし、それは、やがて初期マルクスがリカードウの労働価値説を受容する素地をととのえたとはいいうるのであろう。そして事実、マルクスは、その後、彼独自の「概念的把握(Begreifen)」の方法に基づいて、エンゲルスの影響から次第に脱却しつつ、いわば自力でスミスやリカードウの投下労働説へと接近してゆくのであって、すでに見たように、『哲学の貧困』になると、リカードウの投下労働説に積極的評価を与えて、マルクス自身、はっきりと労働価値説の立場を表明するのである。つまり、同書ではマルクスは、『手稿』における「疎外された労働」概念から「価値」範疇への移行をなしとげたわけである。げんに、『哲学の貧困』でのマルクスは、労働価値説にかんするリカードウの所論を「こうも正確で、こうも明快な、そしてこうも簡潔なりカードウの言い方」(MEW, Bd. 4, S. 81. 『全集』第4巻, 78ページ)と評しながら、「リカードウは……労働時間によって決定される価

値に彼の全体系の基礎を置いた」（ebenda, S.113. 前掲訳書, 114ページ）とか、「リカードウの価値論は現存の経済生活の科学的解説であり」（ebenda, S.81. 前掲訳書, 79ページ）、「労働時間による価値の決定は……リカードウが明快鮮明に証明したように、現存社会の経済的諸関係の科学的表現である」（ebenda, S.98. 前掲訳書, 96ページ）と強調している。また、同書ではマルクスは、「〔価値法則を〕原理とするリカードウの体系」にかんして、それを「一個の科学的体系」とまで称揚している（Vgl. ebenda, S.78, S.82. 前掲訳書, 75ページ, 79ページ, 参照）。

- * この「概念的把握」の方法がどのようなものであり、また、それが『手稿』における「疎外された労働」論の展開にとってどんな意義をもっていたかにかんしては、さしあたり前記拙稿「初期マルクスの経済理論について」、本誌第16巻第3・4合併号、とくに104—106ページを参照されたい。

このように、『哲学の貧困』ではマルクスは、リカードウにあっては労働時間による価値規定が「彼の全体系の基礎」になっていること、リカードウ経済学が、価値法則を「原理」とする「一個の科学的体系」にほかならないことを力説するわけだが、これはとりもなおさず、同書でのマルクスが彼自身、のちに『資本論』全3巻をつらぬくもう一つの基本視角となった価値法則——といっても、まだリカードウ的なそれにとどまっているが——という統一的な説明原理を、はじめて自己の理論展開の基礎に据えたことを意味しているといつてよからう。

しかしながら、そうだとすれば、服部教授のように、『哲学の貧困』における労働価値説の成立に少しも言及することなしに、「価値論＝商品把握」の未確立という点で1840年代のマルクスの経済学研究は「50年代以降の経済学研究と一線が画される」と主張する場合には、40年代のマルクスにおける労働価値説の成立（とくに『哲学の貧困』での）という事実を過少評価することになり、ひいては40年代のマルクスの経済学研究と50年代以降のそれとをいわば切断してしまうことになりはしないであろうか？

もっとも、ここでわれわれは、著者が「あとがき」で断っておられるように、「本巻には、1957年から1983年にかけて、私がおとときどきの必要に迫られて、または需めに応じて書きしるした論文のうちから、マルクスおよびエンゲルスの共著『聖家族』(1845年刊)にいたるまでのマルクス主義の形成期に関するものを選んで収録した」(300ページ。力点——引用者)という点、そしてこの『聖家族』をとりあげている第3篇、Ⅲ、第14章「『聖家族』の経済学的意義」のなかでは、著者は、「『聖家族』に見られるマルクスの

見解は、いまだ労働価値説ではない」（262ページ）と言明されながらも、レーニンや最近のソ連の経済学者たち（ア・イ・マルシシヤイ・ゲ・ブリューミンら）の所論を紹介するにさいしては、『聖家族』でのマルクスがかなり労働価値説に接近していたことを肯定しているかに読みとれる文章を書いておられる（253—264ページ、参照）という点に留意しなければなるまい。しかし、それにしても、服部教授が、『哲学の貧困』に見られる労働価値説に論及することなしに、「そこ〔1840年代におけるマルクスの「国民経済学批判のこころみ」——引用者〕には、基本的にいって、その基底となるべき価値論＝商品把握はまだ確立していない。50年代以降の経済学研究と一線が画されるゆえんである」と主張されるのは、私には納得がゆかないというほかはない。しかも教授は、これまでのマルクス経済学の研究状況について、「……『手稿』重視の反面、とくに1840年代のマルクス経済学の形成過程が、かならずしも精密にあとづけられてはいないうらみがある」（244ページ）という批判をもっておられるだけに、教授の上掲主張は、周到的文献考証を身上とされる教授にしては、やや不用意なものといわざるをえない。

〔4〕

前節で見たところから明らかなように、『哲学の貧困』においてマルクスは、のちに『資本論』全3巻をつうじて首尾一貫的に固持されることになった二つの基本視角、すなわち(1)ブルジョア社会のすべてのカテゴリーを、一定の歴史的に規定された生産関係の表現としてとらえるという特殊歴史的な形態規定の視角（これによって、いわゆる物神性の解明も可能となった）と、(2)あらゆる経済学的範疇をブルジョア社会のもっとも基礎的な、もっとも基底的な法則＝原理である価値法則に基づいて展開するという視角、この二つの基本視角を初めて定立し定礎したのであった。そして、ここに『哲学の貧困』のエポック・メイキングな学問的意義があった、というべきであろう。なるほど、マルクス自身もいっているように、彼は1850年になって以降、ロンドンで経済学研究を「まったく初めからやりなおし」たのではあるが、しかし、彼はそれ以前に、とりわけ『哲学の貧困』で上記の二つの基本視角をすでに定礎していたからこそ、50年代以降の経済学研究を『資本論』体系に結実させることができたのであった。この意味では、1840年代のマルクスの経済学研究は、1850年代以降のそれと深部において連結ないし接続していた

といってよい。そしてそうである以上、服部教授のように、『手稿』にはじまるマルクスの国民経済学批判は、1840年代を通じて、……なお資本蓄積論の観点のみからする国民経済学批判のこころみであった」と断ずるのは、——繰り返していうが——蓄積論偏重の立場からなされた一面的な主張であり、また、つづけて教授が、「そこには、基本的にいって、その基底となるべき価値論＝商品把握はまだ確立していない。50年代以降の経済学研究と一線が画されるゆえんである」とするのは、『哲学の貧困』における労働価値説の成立という事実を過少評価して、ひいては40年代のマルクスの経済学研究と50年代以降のそれとを切断することにもなりかねない、といわざるをえない。むしろわれわれは、服部教授自身がいわれるように、「1840年代のマルクス経済学〔むろん労働価値説をも含めて〕の形成過程」を「精密にあとづけ」ることにもっと力を注ぐべきであろう。

それはともあれ、服部教授の著書『マルクス主義の形成』は、上述のように、私には問題ないし疑問だと思われる立言を含んでいるのだが、しかし、すでに本稿の〔2〕で見たように、この書物にはメリットだとすべき一連の所説が展開されている。念のために、ここでそれらを要約しておこう。——(1)著者は、「ヘーゲル法哲学批判 序説」から若干の章句、たとえば「哲学がプロレタリアートのうちにその物質的武器を見いだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神的武器を見いだす」という章句を引用したうえで、マルクスのこうした命題は「たんなる一般的表現」あるいは「たんなる一般的命題のレトリカルな表現」と解すべきではなく、どこまでも当時の後進国「ドイツの解放の問題にかかわるもの」と見なすべきだと強調された。(2)著者は、ラービン論文および山中論文をともに高く評価して、これらの論文によって『手稿』にかんする「情報」が「格段に正確かつ豊富になった」と述べながらも、「なお不明の点が残っていたし、さらに新たな疑問も生じてきた」として、『手稿』についての詳細で綿密な「書誌学的考察」をおしすすめられ、その成果を本書第10章で整理・集約された。(3)ただし、著者にとっては、こうした「書誌学的考察」はけっしてそれ自体が目的ではなく、どこまでも「内容の理論的分析」あるいは「理論的把握」のための「基礎的作業」にすぎないのであって、こういう認識のもとで著者は『手稿』の「理論的把握」の深化につとめられた。(4)著者・服部教授は、1978年3月末から同年5月末までの2カ月間、ベルリンで新MEGAの編集作業を視察する機会が与えられたが、そのさい教授は『経済学—哲学手稿』についても、アムステルダムの「社会史国際研究所」での調査を終えたのち、東独の「マルクス＝レーニン主義研究所」において『手稿』の研究者たちと意見交換を

することができた、そしてこうした「在外研究」の貴重な成果は、とりわけ第3篇『『経済学・哲学手稿』の研究』の第11章から第13章までの諸章に手際よく集約され、盛り込まれている。(5)服部教授は、『手稿』のなかでマルクスは「解決することのできないアポリア」に陥っているとする見解にたいして「大きな疑問」を表明され、教授自身は、もともと『手稿』にはアポリアなるものは存在しないとされて、この点を資本蓄積論の見地から十分説得的に論証された。

本書には、こうした一連のメリットと思われる所説が展開されているのであるが、さらに本書には、これらの卓見のほかにも、鋭い指摘や興味深い所説、重要な見解などが数多く含まれている。いま、それらのうち若干のものを手短かに例示しておけば、次のごとくである。

①著者は、ロシアのナロードニキ主義にかんして、「レーニンがマルクス主義を発展させるにあたって、このナロードニキ主義の遺産の批判的摂取をおこなったことを、過少評価してはならない」（9ページ）と注意され、ひきつづき次のように書いておられるが、これは鋭い指摘だというべきだろう。——「いわばレーニン主義の源泉ともみなすべきナロードニキ主義は、単にロシアにおける空想的社会主義であるという一般的・抽象的な評価によっては、その本質を明らかにすることはできないのであって、これが、ロシアにおける農奴制・ツァーリズムに対する農民の民主主義のイデオロギーであったことを見失ってはならない。この点に、ナロードニキ主義が、西ヨーロッパの空想的社会主義とは異なって、農民大衆に依拠する革命的な性格を有していたと同時に、その『社会主義』が、ロシアにおける農業共同体＝ミールを基礎とする具体的な性格をも有していたという特殊性があるのである」（9—10ページ）。②モスクワのクレムリン近傍に、レーニンの指示によって1918年に建てられた「大革命家・思想家記念碑」が立っているが、服部教授は、このオペリスクの碑面にマルクス、エンゲルス、サン・シモン、フーリエ、プルードン、リープクネヒト、プレハーノフら19人の名が記されているなかで、そこに当然あるべき人物の名前、すなわちロバート・オーウェンの名が見られないのはなぜかと問うて、その理由を、社会主義思想にかんしてはレーニンが主としてプレハーノフ——彼はフランスの空想的社会主義をとくに重視した——の見解に依拠していた点に求めておられるが、これは興味深い所説だといえよう。③著者は、マルクス研究の現代的意義を説いて、なかならず次のように論述されるのだが、これは正鵠を射た所論というべきであろう。やや長いが重要なので、煩をいとわず引用しておこう。「われわれが研

究対象とすべきは、なによりも今日のわれわれをとりまく現実であって、マルクスそのものを研究対象とするがごときは、その緊要性において劣るものといわざるをえない——このような主張も、よく耳にするところである。しかし、このような受けとりかたや主張は、むしろ一般的かつ抽象的な理解にとどまるものであって、今日、マルクス研究が——それも、多種多様の見地に立ち、それぞれ傾向を異にするマルクス研究が、相対立する結論を引き出し、さらには現実変革のための実践活動にも直接間接の影響を及ぼしているという事実を、十分に正しく認識しているとはいえないように思われる。また、この種の考えかたのうちには、マルクス主義の創造的発展を、マルクス研究の深化から切りはなして、発展する現実の新たな局面ないし段階を、既成もしくは既得の『マルクス主義』理論によって解明することであるかのようにみる傾向がひそんでいるように思われる」(79—80ページ)。^④著者は、現行『マルクス＝エンゲルス全集〔著作集〕』(MEW) 第1巻所収の論文「シュトラウスとフォイエルバッハとの審判者としてのルター」の執筆者がマルクスではなくてフォイエルバッハそのひとだと提唱したハンス＝マルティン・ザスを高く評価しつつ、「この論文の執筆者に関する問題が提起されてからかなりの年数がたっているにもかかわらず、不十分、不正確、不徹底な理解や紹介にわざわざいわれて、わが国ではマルクス主義研究者のあいだですら、問題そのものについての認識がごく最近にいたるまで欠如しているのが実状である」(103ページ)と慨嘆されて、この問題についてかなり詳しく説いておられる(とくに103—108ページ、115—117ページ、参照)が、このあたりの所説は明快で説得力がある。^⑤著者によれば、「『経済学・哲学手稿』は、もともと広汎な研究の断片にすぎない」(247ページ)し、また著者は、「『聖家族』をとりあげるばあいにも、その基礎をなすマルクスの『積極的な見解』の形成過程につねに目を注いでいなければならない。さかのぼれば1843年の『ヘーゲル法哲学批判』に始まり、『経済学・哲学手稿』をその一部とする包括的な諸研究が『政治および国民経済学批判』としてかたちをととのえるにいたる過程がそれである」(251ページ)と指摘しておられるが、こうした指摘は、けだし、当を得たものだといえよう、等々。

さて、「紹介」としては、いささか長い論稿になってしまったが、しかし、服部教授の著作『マルクス主義の形成』は、このくらいのスペースをさいて然るべき内実をそなえているのである。すでに本稿のはじめに引用しておいたように、著者・服部教授自身は「あとがき」のなかで、本書のことを控え目に、担当科目「社会思想史」にかんする「講義案作成の準備作業」の「副産物」だとしておられる。けれども、以上に見てきた

ところからも十分に推察されるとおり、実際には本書は、きわめて内容豊かで濃密な、そして理論水準の高い労作だとすべきであろう。とくに本書は、『経済学＝哲学手稿』にかんする手堅い文献考証と、それに基づく同書の理論内容の鋭い分析という点で精彩を放っており、『手稿』の研究には不可欠なものとなっているのである。